

鳥獣保護管理プランナー

小泉 透

国立研究開発法人森林総合研究所

対象鳥獣
ニホンジカ

活動地域
静岡県
(富士山地域)

事業内容

富士山国有林におけるニホンジカ管理

事業の背景

富士山は、2013年に「富士山－信仰の対象と芸術の源泉」として世界文化遺産に登録されたが、それ以前から富士箱根伊豆国立公園の一部として数多くの自然保護区が設定され、富士国有林もほとんどが鳥獣保護区に指定されてきた。このため、2013年当時にはニホンジカの生息密度はきわめて高く、樹木の剥皮や下層植生の後退が広い範囲で確認されるなど、森林に対するニホンジカの強いインパクトが報告されてきた。

依頼を受けて実施した内容

(1) バックキャストによる管理計画

ニホンジカが森林生態系の中で担ってきた「森林を適度にかく乱して更新を促す」状態に誘導することを最終目標とし、そこに到達するために4つの段階（高密度ニホンジカ個体群が低密度化する、低密度個体群が安定して維持される、防護柵を設置せずに人工林が成林する、防護柵を設置せずに広範囲で天然林の更新が可能になる）を設定した。適正密度は設定せず、密度指標と植生指標の変化をモニタリングして、それぞれの段階の達成度を評価することにした。

(2) きちんとニホンジカを管理するための6つのルール

効果的で、効率的で、持続的な管理を進めるために、以下の6つのルールを定めた。①安全に捕獲する（事故防止と万一の銃事故に対応した救急用具の装備）、②確実に捕獲する（捕獲数を最大ではなく、獲り逃がしを最小にする）、③ニホンジカの生態と行動を捕獲に活用する、④捕獲の効果を定量的に測定する、⑤ニホンジカ捕獲作業にも配慮して森林整備事業を計画する、⑥捕獲に要する経費等、事業を持続させるための記録を作成する。

(3) チーム富士山による実行体制

上記のルールのうち、①②を担当する捕獲者、③④を担当する調査者、⑤⑥を担当する森林管理者は、組織的上下関係を持たない。こうした異業種が連携する事業体制としてチーム制を導入し、「チーム富士山」と呼称した。チーム内ではそれぞれの構成員の立場はフラット（均等）である。チームの達成目標や方法に対してそれぞれの立場から自由に意見を述べるができる。こうした原則に基づいて、ラウンドテーブルディスカッションとも呼ばれる議論を通じて、それぞれの構成員が事業目的に対する理解を共有するようにした。また、作業要領を作成し、どの作業をだれが担当するか、分業体系を明確にした。

事業の結果

2012年度から捕獲を開始した地域では、全域で二ホンジカの密度指標の低下が確認され（図1）、一部では下層植生の回復が見られるようになった（写真1）。管理計画のうち、高密度な二ホンジカの低減化、二ホンジカ密度を低く安定化させる、の段階は達成されたと判断し、現在、防護柵をしない人工造林にむけて新たな計画を立案中である。

全国的な二ホンジカ被害の激化の背景には個体数の増加があるが、手当たり次第に二ホンジカを捕獲しても問題は解決せず、当事者がチームを組んで、統制の取れた捕獲（捕獲のガバナンス）を進めることが重要である。



写真1 2013年8月、2018年9月の森林の状況（同一地点）

2013年：下層植生が著しく後退している

2018年：イネ科、バラ科が回復してきたが、木本の回復にはさらに時間がかかる

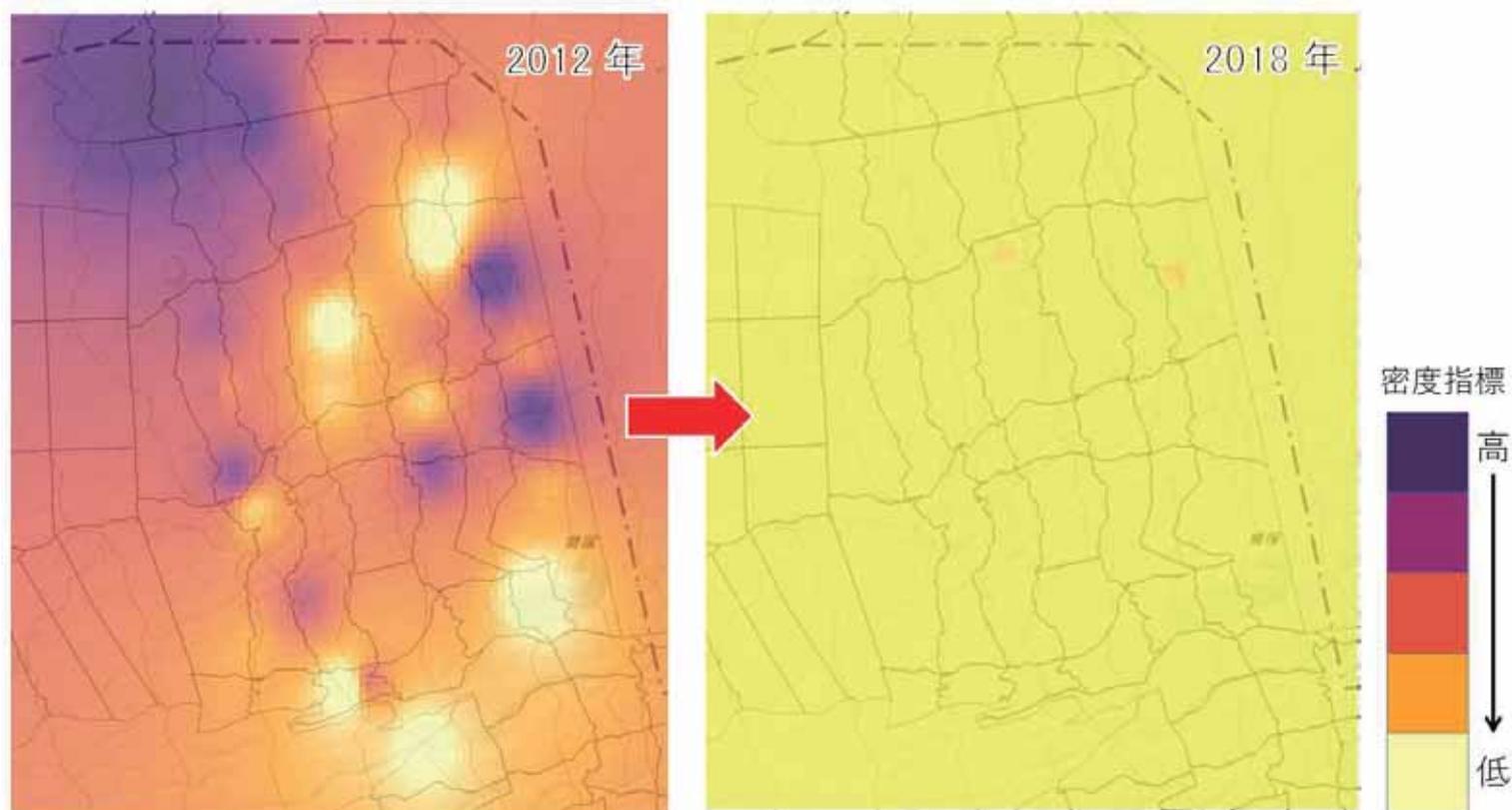


図1 2012年8月から2018年12月の二ホンジカ密度指標の分布
2012年：北西部を中心に密度指標が高い地域が点在している
2018年：ほぼ全域で密度指標の低下がみられる